

方等時に属する經典分類を通しての 五時説の意味の再考

崔 恩 英

1. はじめに

五時説の内容は經典に対する分類において、經典目録や大藏經の編制体系と密接に関連している。大藏經の分類基準は大きく三つある。1) 經典の歴史的な発展段階を考慮して、新しく分類体系を導入した大正新脩大藏經、2) 開寶藏以降、大藏經の入藏基準となった『開元釈教録』、3) 已続藏經が根拠とする『閱藏知津』。歴代の大藏經は知昇の『開元釈教録』の編制に従って編纂された。知昇は重短合訳された大乘經典を、般若部、宝積部、大集部、華嚴部、涅槃部、五大部外諸重訳經、そして短訳大乘經に分けて、初めて体系的な分類の基準を作った¹⁾。この分類基準において、特定の宗派との関連性を見出すことは容易ではなく、殊に、『法華經』、『思益經』、『金光明經』、『楞伽經』、『解深密經』などがすべて五大部外諸重訳經に入っている点は、教判説との関連性を推定し難くする。『法華經』を除くと、これらの經典はすべて五時説の方等時に属する經典である。

已続藏經は智旭の『閱藏知津』の分類体系に従って編制されている。『閱藏知津』は凡例において、全体目録を分類する方法を詳しく紹介している。基本的に大乘經を前に置き、小乘經を後に位置させながら、その中の大乘經を、一華嚴部、二方等部、三般若部、四法華部、五涅槃部に分類する。従って、嚴密には天台の五時とは相違がある。しかし、智旭は『彙目義門』の五時説による分類の不備を補完するとし、また天台の五時説には通別の区分があると闡明する。従って、通論として、華嚴から涅槃に至るまで、如来一代の教えは遍く及んでいると見た。また、菩薩藏と声聞藏は昔からの分類法（古判法）であるとした²⁾。凡例を通して、『閱藏知津』が大きく通五時説、声聞・菩薩の二藏説の立場を取っていることがわかる。

周知のように、方等時は五時説にのみ現れる教判分類として、天台教学においては重要な内容となっている。五時の中の四時（華嚴時、阿含時、般若時、法華涅槃時）は、

(42) 方等時に属する經典分類を通しての五時説の意味の再考（崔）

槃時）は最初から明確であったが、一方、方等時への規定と方等時に帰属すべき經典を教判することは、天台の後学にとっては残された課題であったろうと考える。本稿においては、天台智顗から宋代を経て、明代の智旭に至るまでの方等時と、そこに属する主要經典の解説を辿って行くことにする。

2. 方等時經典の特徴と解釈

2.1. 天台智顗の第三方等時の基準

智顗は以前の五時教とは異なる五時説を主張した。五時の教説を通別の教えに分けて、別論すると各時に該当するが、通論すると如来一代の教えの初後に普く説かれたという立場を『法華玄義』で明かしている。

一方、『法華玄義』では方等時の經典の特徴を、「折小彈偏歎大褒円」と言っており、方等經の區別基準が大小相對と偏円相對という観点に基づいていることがわかる。方等時の基準となった大小の解釈は明らかであるが、偏円の解釈はどうか。『摩訶止観』で最も直接的な説明がなされている³⁾。

偏円章は大小、権実などの違いがあることを知る必要があるので説かれている。円教という究極の教えに至る前の大乘半字のあらゆる教えが偏である。偏円は、観法においては、円教止観の一心三観だけを「円」といい、藏教析法止観で別教の止観により中諦に入る、あらゆる観法を「偏」という。それ故、偏は藏通別教の観法と教えを指すのであり、円は円教の止観と教えだけがこれに相当する。従って、偏の意味は二通りに解釈され得る。ところが、『法華玄義』には、第三時を説明して、「抑挫声聞褒揚菩薩」、「折挫諸偏菩薩、褒揚極円菩薩」、「折挫諸権菩薩、褒揚於実菩薩」という表現がある。これは偏円を、藏通別／円教の教えに局限することを超えて、広い意味では声聞（藏）／菩薩（藏）、或いは権／実の意味を含む概念として解釈される可能性を開くものである。

また、不定教に属する經典が方等時と関係する。すなわち、『法華玄義』では偏旁不定教を説明して、非次第であり、常住の道理を明かす別の一部類として、『金光明經』、『勝鬘經』、『楞伽經』、『央掘魔羅經』を挙げている。そこで、『央掘魔羅經』が彈訶と非次第を現すように、『淨名經』も同じ部類の教えになると看做す⁴⁾。これに基づいて、天台の後学達は『淨名經』が属する方等時と不定教とを関連付けるようになり、それが以降に流行した新訳經典の教相を判釈する際にも有効になったのである。

これにより、天台智顗が方等時に属する經典を理解した範囲が示されたことに

なる。1) 五時を通別に分けてみる点、2) 彈偏折小歎大褒円の基準。ここでの偏円の基準は、化法四教に局限されず、声聞／菩薩、或いは権／実の教えを含む広い範囲で解釈される。3) 不定教に属し、非次第と常住とを明かす特徴を有するものが、方等時に属する經典なのである。

唐代の灌頂や湛然の場合は、方等時の基準に対する独自の説明は見当たらない。その時期までは、まだ新たに漢訳されて仏教学全体に影響を与えた經典がなかったと推定される。本稿においては、その理由を追究することが目的ではないため、宋代以後、『楞嚴經』の解釈において方等時が通論中心の説明へと具体化されていくのを確かめることにする。

2.2. 宋代以後、天台学僧達の方等經典に対する解釈——『楞嚴經』を中心に

高麗の諦観によって整理された『天台四教儀』の中の方等時に属する經典は、天台智顗当時のものと同一である⁵⁾。基本的には別五時の立場に立ち、折小歎大の範疇で説明しているのである。

後に、宋代の天台学僧達による經典注釈において、重要なものとして議論される經典は『楞嚴經』である。神智従義（1042～1091）は『法華三大部補註』と『止観義例纂要』において、『金光明經』が方等後文であるように、『楞嚴經』も方等後文であると明かしている⁶⁾。この經の中に、『妙法華經』に定性声聞と一切が一乗の寂滅道場を得るとの内容があるのを引用して、方等後分經と看做したのである。天台とその他の文献によって、ここで初めて、『金光明經』と同じ分類根拠により、『楞嚴經』が方等時に属するということが明らかになった。

北峰宗印（1148～1213）は、『楞嚴經集註』において『楞嚴經』の題目を五重玄義で解釈し、醍醐味の教相と判釈した。数人の先学たちの異見を紹介しながら、『楞嚴經』の前半には次第があり、後半は非次第であるが、方等に帰属することが妥当であるようだと、明かしている。そこで、以前の先学たちが華嚴、般若、法華、涅槃以外の多くの小乗（經）を鹿苑（時）に帰属させ、多くの大乘（經）は方等（時）に通摂したと紹介している。ところが、この膨大な説を唱えた先学が誰であるかを明かさなかった。そして、通五時には文通と義通があるが、『楞嚴經』が方等になるのは經の前半にのみ該当するとし、このような部類は經家を結集し、収通帰別する文通という独特の見解を示している⁷⁾。

明代の伝灯は『楞嚴經玄義』において『楞嚴經集註』をそのまま継承し、『楞嚴經』は通五時説の中でも収通帰別する文通の經典と判釈する。『楞嚴經玄義』で注目されるもう一つの点は、伝灯が如来一代の教説の時教を大小偏円をもって

(44) 方等時に属する經典分類を通しての五時説の意味の再考（崔）

区分するということである⁸⁾。これは伝灯が智顗の弾偏折小歎大褒円という、方等時の基準を継承していることを示すものであると思われる。

伝灯は智旭の天台思想に直接的な影響を与えた人物として知られている。智旭(1599～1655)の『楞嚴經文句』では、この經が生酥味であるが、毒を發して死に至らしめることがあるのを挙げて、方等部の中の円頓味に当たると注釈している。これは宗印が『楞嚴經』の教相を醍醐味と解釈した、その延長にあるのである。『楞嚴經』を方等時と見る解釈は、宗印以降、通五時的な立場が強調されて解釈されたことを示している⁹⁾。

2.3. 智旭の『閲蔵知津』に於ける『楞嚴經』と『円覺經』の教相

『閲蔵知津』は仏教典籍を分類し、それぞれの經典を品に随順して紹介する經典解説書である。故に、「まだ（經典を）閲覽していない者は（閲蔵知津を読めば）前後の宜しきを知り、すでに閲覽した者は権實に包摂されることを知る。義を持つ者は約に即して広を知り、文を持つ者は広を理解し約に帰することができる。権であれ、実であれ、一心を出ず、広であれ、約であれ、一相に咸通する。故に『閲蔵知津』と名づく」¹⁰⁾と明かしている。この一節から、宗印の義通と文通を継承していると推定することができるだろう。凡例には密部の經典の中に、華嚴、法華、般若の名がすべて見られるとし、儀軌と呪文などは秘密宗に属するが、これらは49年の間、如来が通的に説いたということを挙げて、すべて方等大教に入れるとしている。これにより、智顗が特に定義していなかった、多くの密部の經典がすべて方等部に入る準拠が整ったのである。

各部の最初に「述曰く」という内容があるが、それは「部」全体の性格を説明する。方等部の「述曰く」（『閲蔵知津』J31, p. 799c4-13）の説明によると、如来一代の教えは声聞蔵と菩薩蔵が最も大きい範疇ということになる。大乘と方等はすべて菩薩蔵に属する。大乘のなかで、華嚴部、般若部、法華部、涅槃部を除いて、顯教であれ、密教であれ、小乗の教えを対治して大乘の教えを明かすもの、或は諸仏菩薩の因・果・事・理・行・位・智・断を明かすものは方等部に収められるのである。この内容は智顗が立てた大小／偏（声聞蔵）円（菩薩蔵）相對の觀點が反映された方等時の説明と考えることができる。

方等部はさらに方等顯説部と方等密呪部に分けられ、密呪部はさらに經と儀軌に分類される。『楞嚴經』はこの中で方等密呪經に属する。

『楞嚴經』は方等經であるが、円教の解を開き、円行を示し、円位を明かす、宗教の準則であり、性・相の総要であって、一代法門の精髓として、成仏し祖師

になる正印であると、表現されている。この説明は『楞嚴經文句』において、『楞嚴經』の教相を方等部の中の円頓味と看做したことで、同じ脈絡と言えよう。

『閲蔵知津』において『円覚經』は華嚴部に属する。この説明の中には教判に関連する内容は全く見当たらない。

『円覚經』における教相判釈に関連するような内容は、『円覚經略疏鈔』に見出すことができる¹¹⁾。宗密は不定教の説明をする中で、上機根の者のために頓を顕す一真覺性なる常住の義を説く如来の教えの一つとして、『央掘魔羅經』、『如来藏經』、『勝鬘經』、『金光明經』と共に、『円覚經』を入れるという説明を紹介している。これは『円覚經』を、頓教としつつ、不定教と結びつける内容と言える。天台家において、不定教と方等時の經典とを関連付けたことを考慮すると、『円覚經』は方等時に属すると解することができるだろう。宋代の釈知聡は『円覚經心鏡』において、『円覚經』は方等部に属し、教と味においては一円であると明かしている。伝灯は『性善惡論』で、『維摩經』、『楞伽經』、そして『円覚經』と『楞嚴經』が第三方等時に属し、『円覚經』と『楞嚴經』が性具善惡の旨を最もよく發揮していると称嘆している¹²⁾。しかし、伝灯の影響を受けたと知られる智旭は、『閲蔵知津』で『円覚經』を方等部ではなく、華嚴部に入れているが、詳しい教判の説明は見当たらない状況である¹³⁾。

今日、全世界の仏教学者達が多く活用しているCBETAの續蔵經分類において、『円覚經逸文』は印度撰述經部の華嚴部に属しているが、中国撰述の大小乗經經部の『円覚經』註釈書は方等部疏に属している¹⁴⁾。これは一つの經典の判属を二つに分類しているわけであって、混乱を生じさせる側面があると言い得る。もし『閲蔵知津』に依拠するならば、大小乗經經部にある『円覚經』の註釈書は華嚴部に変えるべきであり、それにより一貫性を保つことができるだろう。

3. 方等時の經典分類を通してみた天台五時説の現代的な価値

初伝の漢訳の時期から天台智顗が生きていた時期まで、漢訳された大乘經典を体系的に分類する一つの基準を天台の五時説が提供してくれた。そして、智顗の死後に翻訳されたり、撰述された密教經典を含む多くの大乘經典についても、この基準は有効であった。おそらく宗印を起点とする1200年頃からは、華嚴、般若、法華、涅槃に属しない多くの經典をすべて方等部に帰属せしめることが、天台学においては当然の基準となつたろうと推定される。

特に、『楞嚴經』、『円覚經』のように、宋代以後、諸教に持続的に影響を与え

(46) 方等時に属する經典分類を通しての五時説の意味の再考 (崔)

た諸經典が帰属される根拠を、方等時の規定において見出すことができる。通五時説の基準、すなわち厳格な折小弾偏歎大褒円には及ばないが、大小／偏円相對の観点を継承している様子を確認することができる。その結果、1600年代に智旭が『閲蔵知津』で示す分類の凡例に至ったのである。『閲蔵知津』の分類基準はさらに卍統藏經分類の根拠となった。

- 1) 明詮は『大周刊定衆經目錄』において、大乘の重訳經の中で類似する經典類を纏めて、華嚴經枝派、般若枝分、大集經枝派、涅槃枝分、文殊舍利仏土嚴淨枝分等に区分した。しかし、經典分類に対する明確な基準があったとは看做し難く、これら以外の大乗重訳經に対しては区分をしない状態のままにした。従って、自ら分類の基準をはっきり持って、一貫して分類した人は、知昇が初めてであると言える。
- 2) 『閲蔵知津』(J31, p. 771a25-26).
- 3) 『摩訶止観』(T46, pp. 32a12-33a8).
- 4) 『法華玄義』(T33, p. 803b8-18).
- 5) 『天台四教儀』(T46, p. 774c).
- 6) 『三大部補注』(X28, p. 182a2-6).
- 7) 『楞嚴經集註』(X11, p. 169a8-24).
- 8) 『楞嚴經玄義』(X13, p. 32c5-6) 釈迦如来所説一代時教、適時而進、大小偏円各有区分。
- 9) 智旭の通五時説的立場を重視した研究は、岩城英規(「智旭の教判論——通の五時重視という特徴に焦点を当てて」、『天台学報』42, 2000)を参照。
- 10) 『閲蔵知津』(J31, p. 771b3-6).
- 11) 『円覚經略疏鈔』(X9, p. 849b4-5).
- 12) 『性善惡論』(X57, p. 377b10-11).
- 13) 『教観綱宗』(T46, p. 938a13-14)に「所頓説、唯局華嚴(凡一代中、直説界外大法、不与三乗共者、如梵網円覚等經、並宜收入此部。是謂以別定通、攝通入別也)」という内容がある。
- 14) CBETA 統藏經は基本的に日本で刊行された卍統藏經(1912)を電算化したものである。もとの卍統藏經は印度撰述と中国撰述、大小乗釈經部の順になっているが、部を分離し明示してはいない。CBETAでは、探しやすいように、部を分け、補完して刊行された卍新纂統藏經を挿入して、現在の編集体系が整うに至っている。

(二〇〇七年韓国政府教育科学技術部の財源による韓国研究財団の支援 NRF-361-2007-1-AM0046 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 方等時、五時説、智顗、『閲蔵知津』、卍統藏經、智旭

(金剛大学校仏教文化研究所 HK 教授、哲学博士)